法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

太陽の木と鳥 ： 「おもろ」と『楚辞』

中村，哲 / ナカムラ，アキラ

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
3
(開始ページ / Start Page)
209
(終了ページ / End Page)
228
(発行年 / Year)
1976-07-28
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015513

太陽の木と鳥

――「おもろ」と『楚辞』――

中村　哲

1　日の出と桑

「おもろ」には、昇る太陽を讃美し、また昇る太陽になぞらえて尚国王を讃えたものが多い。それは首里王府が琉球列島の島々に伝わる古来の歌謡を集成したものであるから、中には王朝の政治的表現の強いものが収められることになっている。てだという言葉は太陽の意味であるが、同時に国王の美称として尚王朝によって独占されてきた。大和王朝は太陽祭儀を行う天照大神の後裔たる天皇が太陽とかかわりをもつとされている点で、同一類型の文化圏にある。その際、それが琉球列島のなかでも大和王朝と関係の深い王府の歌謡だということも配慮することは必要であろう。同じ東洋のなかでも、このことは中国やイス

ラエルの場合のように支配者が太陽に結びつくのではなく、むしろ太陽と結びつく可能性はありながら、しかも、これを、つねに拒否してきているという事例に対比される。中国の場合には、諸侯の上に統一支配を行う帝王が抽象的な天の観念との結びつきで、その正当性を語ろうとするが、具体的な自然現象としての太陽と結びついて、その威信を語ることは少ない。それでも『礼記』（祭法二十三篇）のなかに、天の祭儀を行う帝王の行事として、太陽を祭る王宮という祭殿が別に設けられていたということを少ない例として挙げることができる。イスラエルにおいては一時ダビテの子ソロモンが王国を形成したときに、所謂ソロモンの神殿においては太陽が祭られたとされている。『旧約聖書』「列王記」は太陽、月、星の崇拝がこにおいてもあったことを伝えているけれども、天の神のみを唯一の神として認めるイスラエルは、ソロモンの神殿の存在にはむしろ抗争した民族であって、太陽崇拝を許容することはしなかったのである。(1) これはイスラエルの民が神の国の思想をもっていたが、地上の王国をもつことを避けたことによるのであった。王国の形成は原則として、いづれの国においても、キリスト教文化によって圧殺されないかぎり、太陽の威信によって、その権力を誇示するという建前をとっているといえる。キリスト教がローマ帝国支配と結びついてヨーロッパに普及した後においては、君主の権威はキリスト教の神の思想と結びついて、その威信が語られることになったのである。

日本及びその雛型ともいえる琉球は大陸文化から独立した太平洋の中の島国として、その亜熱帯の性格からして、輝く太陽光線をうけて、ひとびとは太陽とともに日常生活を送っている。この点、同じ島国といっても英国の場合には、北欧及び中欧の例に洩れず、一年の季節的にも一日の時間的にも、空は曇り太

陽をみることに恵まれていない。これに対して日本から南方にかけて、また地中海の南欧諸国を中心に太陽崇拝や太陽とかかわりのある説話が太陽の輝きと結びついて流布されているのであって、琉球文化もそのなかの一つの問題として把えることができる。太陽讃美の王朝である首里王府が蒐集し、編集した『おもろ』の中には、太陽に寄せたおびただしい讃歌が収められている。そのなかで、注目される一つの「おもろ」を手懸りに、ここでは、この島国と大陸との文化の異同を取り上げて、その文化の伝播の問題をも考えてみたいと思う。それは「いろいろのえさおもろ御さうし」のなかにある一篇のことである。これは、察度王である謝名思ひの讃美にはじまる一連の「おもろ」の中の一つで、この時期にはじめて明との修好が行われて、学問と技術に従事する閩人三十六姓の帰化も行われた時代であった。(2) この時期には、多くの中国の古典も齎らされたのであるから、中国思想の移入は当然に考えられる時期であった。問題とする「おもろ」は、つぎの謡である。

東方の　真下に
桑木下　吹く鳥
吾が思ひが
声鳴り出ぢゑて
聞け〳〵肝人
肝人す聞き取れて
てだが穴の真下に

ここには太陽そのものは語られていないが、東方の真下にあって、太陽の昇ってくるところに桑の木があり、恋人よ、そこに鳴きつづける鳥があるという謡である。日の出と桑と鳥を結びつけた発想であるが、これは桑の木と日の出を結びつけている点では『淮南子』『山海経』に同様な発想があり、さらに『楚辞』に溯ることができるだけに中国の民間に古くからあった説話の系統のものであることを想わせる。中国においては太陽の昇る個処は湯谷とか、谷という観念に結びついていて、この「おもろ」との類似が問題となってくる。それは「湯谷自り出で　蒙汜に次る　明自り晦に及び　行く所幾里ぞ」という詩である。ここにいう湯谷は朱子の『楚辞』の注によっても、音が暘と同じで、暘という文字は漢の時代に専ら用いられたという。『説文』には暘は日出也と記している。蒙汜（もうし）は日の入る谷をいったもので、それは昧谷といわれるものにあたる。(3)

「おもろ」の場合には、「てだがあな」とあって、谷が穴になっているようにみえるが、谷も穴も、全く無関係な概念ではなく、ある共通の発想はうかがわれる。ここにいう「てだがあな」はその下に、すぐ言葉がつづいて「その真下に」となっているのであるから、穴の下のさらに深く地の底にまでという意味ともとれる。そうすると、この場合は谷よりも深い地底に対する意識があることになる。しかし、天文的な知識が進んでいた中国にあっても、大地の底について触れたものは聞かないので、琉球において、そこまでの推論をしていたとは、まず考えられない。地動説の現われない世界において、しかも中国の宇宙観では、せいぜい太陽が東から昇って、西に入るという自然感覚に止っているのであるから、太陽が谷よりも深い穴から出てくるという発想がこの島において展開されていたと考える気には、私はなれない。この点

ではあなという言葉が東の方角をいみするあがるいと同義であるとした仲原善忠の解釈に無理がないように思われる。仲原はこのあなの意味が判っきりしないと断った上で、真東風あなとか、真南風あなとか、方向を指しているとみることが適当であろうといっている。[4] それは、海のあなた、山のあなたという場合のあなたに当たるというのであろう。語源的穿鑿は私のよくするところではないが、そうであるとすると、穴から太陽が出るというのでなく、海に臨んで、そのはるか彼方から日の昇ってくる方向に向って眺めた自然感覚であるということになる。そう解釈した場合には、『楚辞』に発する谷と太陽との構想には全く関係のないこととなる。「てだがあな」という言葉を用いている「おもろ」は、「かいふたの親のろ　東方に　通て　今からど　いみ気や　勝る　金杜の親掟　てだがあな　通て」（一〇〇九）、また「知念杜ぐすく　東方のぐすく　按司添いぎや　思い揚げの城　大国杜ぐすく　てだがあなのぐすく」（一〇二〇）など、東方という観念に合わせて、繰り返し言っているようにみえるので、東のかた、太陽のあなたといって東方に注目している言葉のように思われる。「東方の大主」という言葉にあわせたようにして、「てだがあなの大主」といっている「おもろ」（一〇三〇）もあるので、あなたとみるのがよろしいように思われる。[5]

『楚辞』のいう湯谷にはじまる谷の概念については中国の研究者たちによって、古くから探究されている。これについては聞一多は詳細に紹介しているが、水の流れのないもの、つねに流水のないものが谷とよばれてきたので、『呂氏春秋』「慎行篇」の高注によれば、水の流れの有るものは澗とされている。山間の渓谷で、そこが道となっているものが谷であるから、陽谷とか暘谷といえば、太陽がそこを通る道のことであり、従って日の出の道ということになる。[6] この『楚辞』の思想が、もとになって、その後の太陽の

昇る谷の思想が『淮南子』にしても、『山海経』にしても展開されて行くわけだが、これらはいづれも中国大陸における発想であって、東方に海があるということを予想していない。この説話の出来た当時、中国人にとっては、せいぜい中国大陸が世界のすべてとみられ天下と考えられていたのであるから、海の観念が全然なかったわけではないが、太陽の観念に関連しては東にある海の発想は思いつかなかったと思う。中国において天文・地理の思想が一般に行われるようになったのは、戦国の時代で、これらの古典もそのころを中心として作られたもので、それが琉球に古典として入ってきたときには、千数百年以上を経ているのである。この島では、一六世紀には、すでに欧州への海外貿易をも行っていた時代で、[7] 水平線を遠望して、地球の円いことも、うすうす感じていたであろうし、海洋のなかの国であるから、『楚辞』流の発想がそのまま琉球に受容されるわけではなかった。谷から太陽が現われるという中国流の発想が入って来たとしても、島国としては、海にかこまれている実感のなかから、『楚辞』流の天文感がそのまま生かされるわけではない。この種の古典の思想が入ってきたとしても、それが当時の琉球の知識人たちによって変容されてゆく思索の仕方にこそ、注目されるのである。

中国の民俗については『淮南子』『山海経』が記述しているわけだが、『日本書紀』の書き出しが『淮南子』の思想を受けていることは、知られている通りである。これらの書物は『楚辞』の「天問篇」を解釈するために作られたものではないかという朱子の解釈がある。それは宋の洪興祖が『楚辞』の注である王逸の見解に加えて、補注によって『山海経』、『淮南子』を援用していることに注目するからである。[8]

「天問篇」には、なお太陽について詠った詩がいくつかある。その一つは

何くを闊ぢて晦く
何くを開いて明るき
角宿未だ旦けず
曜霊安くにか蔵る

というのであって、なにか扉のようなものの開閉によって一日の明暗がきまると考えているように思われる。角宿とよばれている東方が明けない間には太陽の精はどこに陰れているのであろうかというのである。これは谷から昇って来るまでの太陽がどこかに陰れているということをいったものであるが、そこには、素朴ながら宇宙論的な追究がみられる。ただ、ここでは谷の観念とのかかわりは明らかにはされていない。それは谷の観念と矛盾するわけではないので、谷を前提としても、それ以前の、夜の状態について言っているものである。『楚辞』には、もう一つ太陽の詩がある。それは

羲和未だ揚らざるに
若華何ぞ光れる

とも言うのであって、光るものと太陽のかかわりをいったものである。羲和とよばれる日の御者が、太陽を御して昇らないうちに、すでに若木の花の光っているのはなぜかという意味だと青木正児は読解している。(9) しかし、そう解したところで、なお二つのことを明らかにしなくてはならない。その一つは太陽が谷から昇ってくるとしただけでは、若木の下葉が一めんに明るくなってくることの宇宙構造の原因が明らかではないといっているのか、そうではなくて、たんに文学的な感想として太陽が昇らないのに、若木がか

がやいてみえるのはなぜなのか。それほど若木は美しいといっているだけなのか、ということである。ここで、まず、若華といっているものの木の性質が問題となってくる。若華に関しては、『山海経』の「離騒」篇で若木という言葉で触れている。『山海経』「大荒北経篇」の中でも「大荒之中、有衡石山九陰山洞野之山、上有赤樹青葉赤華、名曰若木」とあって、ここではたんに木枝や葉が夜明けに明るんでいることをいっているのではなく、青い葉の赤い花のことを指して、いくらか具体的に取扱っている。この若木について王逸の注しているところをみると、崑崙の西端にあって、地表を照らす木であるとされているが、洪興祖の補注では、その花の光りは赤く、地を照らしていると『山海経』の解釈を援用している。このことが正に朱子のさきに述べた解釈をとる理由であるといえる。

琉球で紅花といわれるはいびすかすは牧野富太郎『新日本植物図鑑』によれば、もとはアフリカ産の花木であるとされており、それが何時、東方にまで繁殖したものかは知らないが、『山海経』のいう大地を照らす赤い光の花といえば、紅花のことを類推させる。この紅花は扶桑とよばれて、福建などの南中国にも、詩に詠われている。『琉球国志略』は扶桑について解説して、一名仏桑といって、蘂が花弁の外に一寸ばかりも伸びて燭のようであるものを照殿紅とよぶといっている。これは中国大陸の人の眼でみた琉球などの南方に咲く学名 Hibiscus Rosa-sinensis というふうりん・はいびすかすのことである。(10)『山海経』の記述は、この紅花を想わせるので、花木のことからいえば、それは南方の叙述である。それなのに伝説上の西方の若木の説明にあてられているところにすじの通らぬものを感ずる。

『楚辞』が若木について詠っているのは「余が馬を咸池に飲ませ　余が轡を扶桑に総び　若木を折って

日を払ひ　聊か逍遙して相羊す」というのであって、西方に太陽が入らんとするのを若木をもって、後へ還らそうとするとか、或いは若木の技で薄くなった光りを払拭して明るくしようとする詩であるとされている。この詩の前には、「朝に蒼梧を発軔して、夕には余は県圃に至る」として屈原が県圃という土地に着いた時の詩がある。これは洪興祖の補注によると崑崙県の地名であるとしているので、その限りでは南方風の紅花と結びつけることには困難がある。太陽の入るに従って、西方に到着したというのが詩の意味であるし、崑崙山といわれるものは中国の西部の山岳地帯のことだからである。

このことについて思い出されるのは、さきに、桑田六郎の「南洋崑崙考」が崑崙という地名には二つの異った意味があって、古来、それが混同されてきたという指摘のあることである。それによると、フランスのフェラン G. Ferrand に「崑崙考」という論文があって、彼は『山海経』巻十六の「大荒西経」の中の崑崙之丘について南洋でいわれている崑崙と混同している。南洋の崑崙に関する史料は呉の時代より以前に溯ることはできないというのであった。崑崙には西域の崑崙と、南洋のそれがあって後世これが混同して使用されることになったという指摘である。(11) 南洋の崑崙は、その多くが馬来語の音訳であるから、中国において古くから称ばれてきた崑崙とは同じ意味ではないに違いない。もともとこの種の古典は民俗記録をとどめているが、所謂道家の思想が含まれていて、神仙説といわれるものの起源でもあり、しかも陰陽説や五行説の形而上学が加味されていて、現実の天文や地理を正確に把えようとしたものではない。それだけに、これらの文献にみられる扶桑とか桑などの樹木についても、必しも特定の種類のものを比定することができるような論述をしているわけではない。このことについては扶桑という名称について白鳥庫吉の「扶桑国

に就いて」という論文に詳しい。[12] 扶桑の国がどこか、扶桑がいかなる木を意味するかという種類の穿鑿は、不老長寿の伝説を具体的な話と思って特定の島を求めて船出するのに等しい。この当時の記述には、陰陽説、五行説等によって作り上げられている観念がからまっていて、たんなる天文・地理をいっているのではない。『淮南子』になると「聖人の乱世に処るは、夏に暑くして暮るるを待つに、桑榆の間逾々忍び易きが若き也」（説林訓篇）といっている。聖人が乱世を処するのは夏の日中の猛暑に耐えて夕暮れを待つことが必要で、そのころになると桑や榆（にれ）の木下では、ますます凌ぎよくなるという意味である。榆の大木と並べて、桑をいうのであるから、この場合は桑の方も楠木のような大木のことをいっているものとして解せられる。楠木は南方の樹木であり白い花をつけるが、これを桑の木と同一視する説が古くからある。桑の木が神聖な樹木であるとされているのは『礼記』であるが、日本では山片蟠桃が『夢の代』のなかで、中国の説によって扶桑は楠木であると説明している。[13] 楠の真種というものは、日本にはないと牧野富太郎は書いているので、そこには植物学上の問題もあるし、地方による名称の違いもある。いづれにしても、楠や桑の木が太陽にかかわる樹木として語られてきたのである。聞一多は桑林、桑山が神の宿る処として伝えられて帝王がそこに祈禱する多くの事例をあげている。[14] この桑は大木を予想させるので、日の出や入り日を陰すほどのものであるから、島国の記述としてはなじめないもののように思われる。そうであるのに、桑の木を詠った「おもろ」が、東方の日の出について桑と雞を関連させているが、それはいうまでもなく、中国からの移入思想で、その他の日の出をたたえる「おもろ」とはいくらか趣向が異っている。この島においては桑といっていても、むしろ扶桑の紅花に当てることの方が自然であるように思う。

紅花を扶桑と称んでいる中国の命名法には、紅花をみて神秘の花木と感じたためではないであろうか。照りかがやく太陽と紅花との照応は、いかにも鮮かで、この島国の印象としては何人にも残るものであるにちがいない。

「おもろ」のなかの「東方の大主、大主が前に　赤木、ゆす木の花の、真白真赤ら咲き居れば、おれよ、取ておりさちへ」とあるのは朱花ではないということだが、太陽とのつながりをいっている点でこの島での語義をよく知らぬ私などには紅花の花咲りがやはり連想させられる。

太陽と紅花の関係はこうしてみると太陽を神とした場合に、琉球では神木となり、よりましの木となりそうなものである。しかし、ここでは紅花は葬祭の献花ではあるが、天なる神への招魂に直接にはかかわりがない。降神をいのるのはクバの大木であって、それは大和王朝の神話が宮柱とよんだ直なる木であるように、直立した柱のような樹木であることが必要だったからである。それはシャーマニズムにおけるよりましには格好の樹木であった。これに対して紅花は中国の『尚書』などの筆法によれば、天の祭儀ではなく、むしろ社稷の神にあたる土地神であり祖神であるものの祭儀にかかわる花木といえるのであろう。

注

(1) マックス・ウェーバー（内田芳明訳）「古代ユダヤ教」二五九頁。

(2) 外間守善「おもろ概説」（『おもろさうし』日本思想大系・一八巻）五三四頁。

(3) 姜亮夫『屈原賦校註』（中華書房）二八三頁。蒙汜とは『爾雅』いう「西至日所入為大蒙」の大蒙のいみであって、汜は水涯とする説のあることを語っている。暘谷は『尚書』堯典篇の中に西の昧谷に対していわれ

ている東の日の出の地名。

(4) 『仲原善忠選集』中巻・一八二頁。

(5) 「おもろ」の番号は「日本思想大系」本による。

(6) 聞一多『楚辞研究論著十種』(維雅書店)一四五頁。

(7) 小葉田淳によれば、一六世紀の前半四分の一の世紀の間にポルトガル人の記録によるとゴール人とよばれたものから、琉球人の手で金がマラッカの方面に輸出されているという。そういうことが琉球と金鉱との話題を生み、金銀島の噂となるが、その一方で十六世紀中頃の中国の記録や西欧人の琉球への直接の接触によって、琉球が金の島ではないことが明らかにされている。それは日本における金銀鉱山の発掘に伴う琉球人の貿易といわれている。小葉田淳「日本と金銀島との関係形態の発展」(台北帝国大学・史学科研究年報・第一輯)。なお「おもろ」の作成はこの年代より、後のことと推定される。

(8) 『内藤湖南全集』第十一巻・九三頁。

(9) 『青木正児全集』第四巻・一五四頁。

(10) 史料叢書『琉球国志略』(広東書局)三の巻・十四―六。

(11) 桑田六郎「南洋崑崙考」(台北帝国大学・史学科研究年報・第一輯)

(12) 『白鳥庫吉全集』第九巻「扶桑国に就いて」。そこでは五行説によって木火土金水のうち、南方を木にあてて、桑の木をいったもので、地理的な記述ではないという。また東南西北を竜・鳥・虎・亀又は蛇にあてて、東を青竜として、青の色が用いられることなどがいわれている。

(13) 山片蟠桃は扶桑を日本のこととして、景行記の十年秋七月筑紫にあったという大樹の話をあてている。『夢ノ代』(日本思想大系・四三巻・三〇二頁)

(14) 聞一多『神話与詩』(未名書屋)一〇二頁以下。

2　日の鳥と時間

「おもろ」には、日の出を讃える太陽讃歌が、その圧巻となっている。てだこと称ばれてて、だの子すなわち太陽の子と自称された首里の国王を讃えるために、そのことは必要なことであった。たとえば「天に鳴響（とよ）む大主　明けもどろの花の　咲いわたり、あれよ、見れよ　美らやよ　地天とよむ大主」また「東(あがるい)の大主　明けまもどろ見れば、天の鳥の舞うさま見物　太陽（てだ）のあなの大主」といって、前者は花の爛漫と咲きわたる姿になぞらえ、後者は天の鳥が舞う様にたとえて、昇りゆく東の太陽を讃えている。いづれも太陽を動きの姿として把えており、移動するがゆえに動的なるものの壮大さを讃えている。このことは、上天とか上帝などとよばれて静止した宇宙の頂点にある最高神を敬する中国とは、その性質において大きな違いがある。琉球においてもニライ・カナイとよばれる天の神があって、中国の天なる神の観念との対比は可能であるが、「おもろ」が島の人々によびかけているのは、天空を移動する太陽の姿であって、天空神の方は背後においやられている。(1) これに対して、中国においては太陽に対する崇仰のあることは否定できないとしても、それは天の観念である上帝や帝のように、ひとびとの魂に呼びかけるほどかかわりの強いものとはされていない。島国の琉球においては、水平線の上に忽然と現われる太陽の讃美が、最高の威信ある存在として、ひとびとの魂をひきつけてやまないのである。ことに、この種の「おもろ」は首里王府の形成過程の時代のものであるだけに、君主政の誇示と太陽崇拝とが深く

結びつけられて、東方の大主という名で昇りゆく姿において太陽が讃美されている。

中国大陸において太陽がのぼる地点だけで把えられる記述はほとんど見ることの出来ないもので、太平洋の中の島国なるが故の思想であることを想わせる。これは、私がさきに琉球王国の形成史について触れたことであるように、首里の尚王朝は東部海岸の地方から発祥したもので、首里丘陵からする、昇る太陽の東方礼拝が、そのまま神の島である久高島へ向けられている。伊波普猷も、このことを語って「三山を統一した、第一尚氏が、島尻の東海岸から起つて、首里に都して以来である。だから、その後の神歌の中には、「にらいの大ぬし」といふ語が、「東方(あがるい)の大ぬし」とか、又は「日(てだ)が穴(あな)の大ぬし」とかになつてゐる」と記している。(2) 首里王国が琉球の東方海岸の部族から発したとしても、それがさらに、いかなる遠隔の地域と関係があったかは、ここでは問わない。しかし、思想の面では王国が太陽礼拝を東方崇仰と結びつけて、昇る太陽の壮大な姿に自己の威信を誇示していることは特徴的である。このことは、大和王朝の場合にも類推されるものがないではなく、大和平野に政権を確立した崇神期には太陽に擬することになった天照大神祭祀の場を日の出を礼拝しうる伊勢へ移動させたのである。大和王朝は太陽信仰を背景として発展してきたが、伊勢神宮の内宮は太陽信仰によって支えられてきたものであって、天照大神という人格神を祭るということになっても、本来の太陽礼拝から切り離されることはなかった。近畿地方において海中から昇り来る太陽を拝むことのできるのは伊勢地方であって、天照と名付ける太陽信仰を冠する神社は、せいぜい近畿地方を中心に集中されていることも、この地形をいみするように思われる。(3) 九州地方の宇佐、大和地方の伊勢は海中より昇る日の出を拝しうる地形にあるがゆえに、大和王朝系の祭祀はこれらの地域

を中心として、八幡信仰を、あるいは、伊勢信仰を発達させているものにちがいない。この場合には、島国の規模が琉球に比していくらか広大なために、太陽礼拝が海中から昇る太陽に集中することは困難であった。このため、日本は国自体を日出る国と語って、海より出づる日の出の景観に拘束されていない。『神皇正統記』は、唐書によってわが国が「日出ル処ニ近キ」といい、また「東海の中に扶桑の木有り、日の出づる処なり」と中国でいわれていたことを伝えているが、幕末の水戸学の会澤正志になると、『新論』では赫々たる太陽の出づる国という表現をとり、いつしか、赫々たる日本という太陽からの類推が極端化した表現にまで至っている。(4) これに比して、琉球における太陽礼拝は島そのものについていう言葉としてでなく、島より遙かに望む海の彼方に向けられて、太陽の赫々たる姿を客観的に把えることになっている。わが国が日本と称ばれ、日の出る国といわれることは西にある中国大陸からみた表現であるから、それをそのまま用いることについては、江戸時代から批判がある。さきの「おもろ」についてみるとき、東方の真下に桑の木があるようにいっているのは、中国大陸内での把え方であって、琉球にとっての東方というのは海上ということになる。それなのに桑の木があって太陽がのぼるという思想のままで、中国で詠われたものを、そのまま琉球に移入させたものであったことを知るのである。白鳥庫吉は、『楚辞』が日の出を桑の木に結びつけているのは、東といっても、せいぜい山東あたりの田園を想像していたからであったといっている。それは海の連想までには及ばなかったのであろう。

もともと太陽は天空を移動するもので、静止したものではない。このため、中国では、この移動の姿を把えるのに、一本の大きな樹木の枝ぶりを借りて表現するものがあり、また天の鳥がこれを抱えて運ぶと

するものがあり、天の馬車に乗って移動すると考えるものがある。西欧においても、バビロンなどでは、この後者の考え方がひろく行われている。中国においても、太陽が竜の車に乗って移動するという思想が帝王の権威を示すことと結びついて、もっとも大きく取り上げられてきたといえる。(5)

中国の場合には、この三つの太陽移動説がそれぞれ説話として形成されているけれども、琉球の場合には、より素朴な、人類の始原の発想を示すようにして、天の鳥が陽の光りをさそうかのように、舞うことが一つの「おもろ」の構想となっている程度である。このような視覚的な自然観察が始原の時代には先ずあって、その上で中国大陸におけるような説話が形成されてくるものであろう。「おもろ」には、始原の人間の素朴なる自然感覚が幸いにも記録されているといえるように思われる。「東方の大主　明けまもどろ見れば、へにの鳥の舞ゆへ見物（みもん）てだがあなの大主」（八二五）にみられる天空における鳥の舞ひ。それに太陽の昇るのを促すようにしてふゑの鳥とされている雞の声がある。静かな島の朝に響くものは、ただ雞の声だけであることは、私など先島に足を踏み入れた者にとっての消えることのない思い出である。このことは、かつての琉球本島や、古き大和においても同様であったことを思わせる。鶏が天の岩戸に隠れた天照大神の再生をよびかけたことは、地に陰れた太陽の再生をまつ論理であって、そこには鶏の役割が太陽ある昼の世界の吸引力となっている。このような太陽そのものの運動は、この当時、いかなるものとして把えられていたのであろうか。

『淮南子』は「天は円に地は方に」といって、天空を半球状の円とみており、地は四角なものとみている。この考え方が陰陽思想の起源でもあって、「道とは、円を体し方に法り、陰を背にして陽を抱き」と

いっている。天を祭る祭壇は『礼記』の記すように円形とされ、社稷の祭りをなす祭壇は四角な壇とすることが行われてきた。『淮南子』には中国特有の陰陽説が前提とされているわけだが、この思想は『易経』をはじめとして、老荘の思想を貫いているもので、この系統の道家の思想には、物の変化を着目して「化」という観念で把えるようになっている。陰陽はもとは山の日のあたる部分とその陰となる部分をいったもので、宇宙万物には陰陽の対立があって、その緊張から変化が生ずるとされているのは一つの弁証法でもあるが、それが中国では図式化されている。このような発想の生ずるのは昼夜にみられる明暗やものの光と陰という点で太陽の動態に関係がある。そのような現象のなかに、太陽の移動する変化が考えられて、それが説話として形成されてくる。民間信仰としての道教は道家のそれとは違うけれども、『淮南子』は老荘の著書に比較して、前者を伝えているところに意味がある。それによると太陽は一日の間に九州と七舎という十六個処をめぐるが、最初には暘谷から出て咸池で水浴びして、扶桑の野をすぎる。このときを晨明といって、最後には蒙谷に至るのであって、このときは定昏といわれる。この間、晨明に始まって朏明、旦明、蚤食、隅中、正中、小遷、餔時、大遷、高舂、下舂、県車、黄昏、定昏という時を刻々としてきざむというのである。『淮南子』は県車の段階で「馬を息わす」といっているから、太陽が、ここでも馬車により移動していることを前提としていることが判る。太陽の御者は『楚辞』「離騒篇」によれば、その記述者の屈原が羲和という御者に命ずると記されている。太陽に乗っているのは彼その人のように書かれているが、これは太陽が屈原の精霊ともいうべきもので、馬車を御するのは羲和に他ならない。

『山海経』「大荒東経篇」の方は、太陽がその出発点として温源谷から発するのであるが、この谷そのも

のが山中にあって、そこに扶桑にあたる一本の扶木がある。そこに複数の太陽が入り交り立ち代って、みな鳥をのせて、一つが到着すると、これまでの太陽が頭に鳥をのせて木を離れてゆくという発想である。(6)これは太陽が谷から昇ってゆくという『楚辞』の着想を前提として、その上で、太陽の一日の移動を、連続した形で把えるのに、花火のように断続して、別のものが、次から次へと換って浮上してゆくという構想に立っている。

『淮南子』の製作は戦国の頃のものとされているが、『山海経』の製作年は決め手のないこととされている。前者の太陽説話については暘谷という暗い谷間から太陽が出て、咸池という水辺で身を潔めるというのであるから、闇と光りの世界を過ぎるに際して、水浴をして地中の汚れをはらうというのは、いかにもあり得る発想で、これが説話の原型のものに近いのであろう。天に対する地の底がアニミズムの考えに立てば、精霊は天空に昇って、その形骸のみが汚れたまま天地に帰するのであるから、その地底をぬけてくる太陽が身を潔めるのは、当然であると思う。これに対して『山海経』「大荒北経篇」の方は「黒歯国はその北にあり、人となり黒歯、稲を食い、蛇を啖う。一は赤く、一は青し、傍にありて、下には湯谷あり、湯谷の上に扶桑あり、十個の太陽の浴するところなり」としている。ここでは他の文献が暘谷といっていたものを湯谷としているので、歯を黒く染める南方の風俗が混入して、十個の太陽が湯の谷に浴するとなっている。そして、さきの十個の太陽の戯画化された飛行が結びつくのである。この発想をみると、『淮南子』の描写の方が、いかにも自然で、その上、暘谷という『楚辞』の言葉が『山海経』にあっては、湯浴みに関連して、湯谷と改められている。従って、この説話の原型としては前者の方が近く、『山海経』

は南方の伝聞を加えた後代の作為によるものと思われる。聞一多も湯谷という言葉がその後変えられていったのは漢の時代に手を加えられたからであるといっている。[7]『山海経』のいう湯谷について郝懿行は「谷中水熱也」としているところをみると、地球の地熱のようなものを想像しているようであり、この注自体が二、三世紀の時代のものであって、倭国とされている日本についての記述も混入してしまっている。

こうしてみると、琉球の場合には、大洋の中の島国であるから、山の合間の湯谷とか暘谷という観念は成り立つことなく、ただ日の出をさそう鳥の役割や、楠の木に比定される桑の大木はないけれども、養蚕にも関係のある桑の木への愛情のあることは、東洋の国々と共通している。中国においては欧州の古きバビロン文明にも共通する馬車と太陽の移動の思想があるが、大和国家にも、首里国家にも、馬の移入がはるか後代のことであるので馬車説話には欠けている。そのことを、むしろ特徴として観察することが必要であると思う。いったいに楚の文化は南方の苗族の説話を蔵していると考えられている。柳田国男は、その最晩年において、日本、琉球を含めて、ひろく楚の文化のなかで考えるべき問題のあることに注意ぶかく学問的関心をよせている。[8] 私もまた、かねてから、そのことを当然と思って来ただけに、ことさら中国古代の問題と比較してみる気になったのであって、その場合でも琉球が東アジアの文化の接点として考える立地条件にあるということである。それはあたかも、ここにはひろく海洋を渡って鳥のように帰去した貿易国家としての舟の行動があることを想って、一そうアジア文化の共通な母体となっているものと、その伝播の態様に興味をもたせるものがあるのである。

注

（1）中村哲「宇宙神話と君主権力の起源」（法学志林・第七十二巻・第三・四号合併号、第七十三巻・第三・第四合併号）

（2）伊波普猷『琉球国由来記』解説（全集・第七巻、四四三頁）

（3）亀松吉大夫西言直「とばかり」（『神宮随筆大成』前篇七〇七頁）。この人は外宮の立場から、伊勢神宮の内宮ばかりが天照という日神を独占すべきではないと主張した。その際、彼が天照という名称を冠した神社をあげているのは、『三代実録』中の山城国天照御門神、備後国天照真良建雄命、『山城風土記』にいう水度社天照高弥牟須比命である。内藤湖南も『日本文化史研究』のなかで大和地方を中心とした天照と冠する神社に注目している。

（4）会沢正志斎は太陽を五行説によって木とみて、穀に宜しきといって、太陽国家論を展開している。『新論』国体篇・下。

（5）出石誠彦『支那上代思想史研究』はインド、ギリシアの例に触れてある。

（6）郝懿行「山海経箋疏」（中華書局）においては、この鳥は三足鳥であるとされている。太陽の動くのを鳥の動きに結びつけたものであるし、鳥占などの動物呪術をみることができる。神武天日王伝説の八咫烏も、この発想の一つとみられる。

アメリカインディアンにおける中心の神が大鴉であること、エリアーデ（久米博訳）「太陽と天空神」一〇二頁。

（7）聞一多『楚辞研究論著十種』一四五頁。

（8）『柳田国男第二対談集』の「民俗学について」中の「国学院の漢文学」二篇。